



『和楽』 No.142 2013年10月号「琳派ってこんなにすごい！」

17世紀はじめごろ、京都の上層町衆だった本阿弥光悦と扇屋の絵師・俵屋宗達が出会い、新たなスタイルの芸術が誕生しました。それが後の日本美術界に多大なる影響を与えることとなった「琳派」です。

(p.53より)

江戸時代にはじまり、現代に至るまで脈々とその様式美が受け継がれてきた「琳派」。ですが、琳派は「派」と呼ばれながらも狩野派などの絵師集団における「派」とは在り方がまったく違うのが特徴です。

狩野派は室町時代以降、基本的には血縁関係による世襲制度のもと、およそ400年にわたって続いた、れっきとした「派」と呼ぶべき存在。足利将軍家から江戸時代の徳川幕府に至るまで、権力体制と強固に結びつきながら、彼らが発注するパブリックな仕事を手がけ続けた、いわば絵画界におけるゼネコン集団でした。

一方琳派と呼ばれる絵師たちですが、彼らは基本的に血縁による関係はなく、生まれた時代も約100年単位で隔たっていて、お互いに面識すらないなど、およそ「派」と呼べるような存在ではありません。

17世紀初頭の俵屋宗達の作品を約100年後に尾形光琳が、その光琳の作品をこれまた約10年後に酒井抱一が、それぞれに憧れ、慕いながら踏襲したことで、絵画様式や作風が継承されたことから、後世の人々によってひとつの「派」として括られ、明治以降、美術関係者の間からともなく「琳派」と呼ばれるようになったのです。

つまり琳派とは、狩野派のような絵師集団ではなく、同様のイメージを先人への強いリスペクトによって受け継いでいった芸術様式のことを指しているのです。

日本にはもともと和歌の世界に本歌取りという伝統があり、先じたよきものを新たな解釈によってより美しいものに昇華させようという意識が強くあります。

宗達の「風神雷神図」を光琳が写したように琳派の作家たちがまずは先人たちの作品をコピーするところから出発している点も、言ってみれば平安時代に編み出された本歌取りという美意識をそのまま踏襲していると言えるでしょう。

(p.56より)

「琳派には(本歌取り)という日本文化の根源がある」『和楽』 No.142 《「琳派」ってこんなに凄い!》

2013年10月号



尾形光琳 《群鶴図屏風》(部分) 国立アジア美術館 フリーア・ギャラリー